

---

# モルモットモード

紺とすん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モルモットモード

### 【著者名】

紺とすん

### 【Zマーク】

N1671Y

### 【あらすじ】

シオリ（高校一年）のよくある感じの一度目のはつこ。  
なんとなく丸めこまれて、ばかっぷるが誕生してしまひやや迷惑な  
話です。

## (1) ひなたぼっこは終了なのか

あ、あぐびしてる。眠いのかな。

なかなかいいものを見た、と頷きながら、シオリは現国の中のテキストに目を戻す。

今の席は、窓際の一番うしろ。それだけだつて、一番前の席なんかに比べれば、ずいぶん恵まれている。しかも、黒板の方を見るような感じでさりげなく斜め前方に顔を向けると、その姿が嫌でも目に入る。むしろ、それを鑑賞するための席ですらある、と思える。

シオリが眺めている人は、草木君という。太陽の陽に多いで「ひなた」と読ませる名前がよく似合つていたその人のことを、今では必要があるときだけ、草木君、と呼ぶ。だがその昔、「ヒナ君」なんていう呼び方をしていたこともあつたのだった。

逆にシオリの方だつて、昔はうるさいぐらいに「シオリちゃん、シオリちゃん」と呼ばれてまとわりつかれていたのに、今ではただ平板に姓の方で呼ばれるだけだ。

そもそものはず、そんな呼び方をしてたのは、もう八年ほども前の話。八年つていつたら、自分のジンセイの半分。いろいろ変わつて当然だよね、とシオリがため息をついたところで現国教師とばつちり目が合い、あわてて厳しい表情をつくつてみた。

「おーい、オレだつて人間だぞ、授業中にそんなにたそがれちゃうなら、成績だつてたそがれちゃうよ」

そう言つた現国教師は、まだ二十代で男性ということだけで生徒から結構人気だ。今も教室各方面から好意的な笑い声があがつてゐる。その発言の元凶となつたシオリの方を振り向いて見る顔のなかに草木君の顔も混じつていて、一瞬目が合つてにやりと笑われてしま

つた気がする。

そこでシオリはまた、何度もかの決意を新たにする。あの姿を目に映さないようにして黒板だけ見ること。口ひ顎をあげるようになればいいんだ、顎を。

と実演しているところにまた草木君が振り向いたのが視界に入り、今度はあきれたような顔をされてしまった。

おかしいなあ、昔はもつと立場が対等だった気がするんだけど。なんだか自分が随分つまらない存在に思える。「ごみ箱のフタ」というフレーズが浮かんで、シオリは慌てて頭をふった。

シオリには、歳が三つ離れた兄がいる。現在大学一年生で、実家を離れて一人暮らしをしているため、最近の様子はシオリにはよくわからない。

通っていた高校はシオリと別だが、高校時代は生徒会でも活躍し、成績もまあまあ優秀、スポーツ関係はけっこつ得意、ということで、人望と人気があった。

ということを、少なくとも両親は信じてる。

現在、若干十六歳のシオリは、この優秀な兄や父、幼少時の経験のおかげで、同級生女子よりは男子に関する深い洞察を得ることができている。

要約すれば、その内容はだいたい次の一点におさまった。

まず、男というものは、思ったよりもバカである（これは成績の良し悪しとは無関係）。

一いつめ、男というものは、女子の基準に照らせば、ほぼ変態である。

たとえば、ご近所からも優秀だと羨まれた兄の部屋からは、しきちゅう妙な笑い声が聞こえてきていた。去年だつたか、「せんぱ

い、あなたは「ミ箱のフタなんかじゃありません」などといつ怪しいセリフを何度も言わされたこともある。土下座までして頼まれて、そう言うだけで一回につき、百円くれた。

そのうえ、兄の場合、妄想が口から洩れてしまつことがままあるらしく、それを聞いてしまつたときなんかは、最悪の気分になつたものだつた。

ちなみに、シオリの父親と兄は性格がよく似ている。父親は事務所を構えて堅い仕事をしているはずだが、シオリから見れば娘の前で下ネタを得意げに披露するへんな人にはぎない。母親は天然だが、基本的にはテンションが低い人だ。普通に恋愛結婚だというが、母が父の何に魅かれたのか、シオリにはさっぱりわからない。

そして、母親の性格から天然なところを差し引くとできあがるのが、自分の性格だ、とシオリは思つてゐる。いや天然なところまでそつくりだ、などと親戚には言われるが、それについては納得しかねていた。

いずれにしろ、地の性格のままだといろいろうまく回らないことも多いので、普段は多少、テンションを上方修正、偽装のうえで生活している。これはシオリだけでなく、多かれ少なかれ、みんながやつてゐることだろう。

ここで問題は、偽装の方の自分にホンモノがすっぽり隠されてしまうことがある、ということだった。

最近やたらと草木君が気になるのも、偽装の方の自分の気持ちに違ひない。中学時代なんて、自分の深い洞察したがつて、男子とはすっぱり無縁の生活を送つていたんだし。

と、いつよくなことを考へてゐるとこりで、授業終了のベルが鳴つた。

なんか疲れた、とシオリは机につづぷした。

「シオリ」

明るく呼ぶ声がして、シオリがもつさりと顔をあげると、さやかがちゃっかり前の席に座つてた。

「いいな、二ノにマークされて。わたしもタチバナじゃなく二ノにマークされたい」

「二ノというのは現国教師二ノ宮の通称、タチバナは英語の女性教師だ。

「ダメだよさやか、二ノなんて枯れ木の中にいるからマトモに見えるだけでしょ？」

「枯れ木ってそんな。先生はともかく、男子はみんな、二ノより若いよ。別に二ノじやなくて男子でいい、いや、男子がいい。たとえば」

例としてあがつた三人ほどの男子の名前の中に、当然のように草木君の名前も入つていて、昔は田立たない子だつたんだけなあ、とシオリはまた遠い目をする。

「あの〜、今の三人には何ら趣味の統一性が感じられないんですけど」

「ねえシオリ、今の三人全員、顔と名前は一致してて言つてる?」

「・・・さやかさすが。すいません、適当なこと言いました」

実はシオリは、草木君以外は誰のことかわかつていなかつた。「だと思った、有名人ばかりなのに。まだみんなフリーだし。もうちょっととそつち方面も興味を持とうね」

「うーん」

「なによ、例のバカヘンタイ説？ まあそういうヤツもいるだろうけどぞ」

「それがね。最近、自分がバカヘンタイかもしんないつて思うこともあるんだよね・・・」

つい草木君の方を見ちゃうときとか、とシオリは心の中で思つた。「うそつ。もしかして、どうとづき見めた？ 相手だれ？」

ちようどんのとき、シオリの席の横を草木君が通り過ぎて行った。

「そうこうわけじや・・・」

「ほお。といいでさ、わたしの方は、聞いて欲しいことがあって。

放課後、ちょっとだけいい?」

シオリが頷くと、さやかはさつさと自分の席に引き揚げて行った。

## (2) あの頃は仲良しだったのだ

小学一年生の頃まで、シオリと草木君は同じマンションに住んでいた。幼稚園も同じで母親ども仲が良く、二人が一緒に遊んだり、登下校したりすることも、ごく自然なことだった。

その頃のシオリは体を動かすことも好きで、活発なタイプだったが、じゃあ遊び友達も活発なタイプが多かつたかと言つて、そうではなかつた。

むしろ、うるさくてガキっぽいクラスの男子全般が苦手だつた。そんな中にあって、当時のシオリの呼び方をすればヒナ君は、下手な女子より穏やかで纖細な感じの子どもで、シオリの一番の仲良しだつた。

その頃のヒナ君は、体が弱くてひょろつとした体型をしており、遠視用のメガネをかけていた。そのメガネを通して見るヒナ君の目は、ぼわっと大きくやさしく見えて、シオリは好きだつたのだが、他の男子からはじいちやんメガネだ老眼だとからかわれて、一人前に扱われていらないようなところがあつた。

女子は口に出してからかうこととはしなかつたものの、何か言われても言い返しもしないヒナ君は、やはり今みたいに目立つ存在ではまったくなかつた。

ちょっととは言い返せばいいのに、とシオリだつて思わないこともなかつたが、当のヒナ君は「大きくなつたら、このメガネはいらなくなるんだつて。だから別に気にしない」などと平然としていて、言い返すのもっぱらシオリの役割だつた。

たしかに今ではメガネをかけていない。あの鋭い感じの目がいい、なんていつてる同級生もいるが、シオリは当時のぼわつとした目にまた会いたいな、と思う。だからといって今の草木君が嫌だというわけじゃないのだが。

もし同じマンションに住んでいなかつたとしても、やつぱりある程度は仲良くなつていただろうと思つが、毎日のよつこお互いの部屋を行き来して遊んだりできたのは、やはつじ近所さんならではだつた。

遊ぶと言つても、マンガを読んだりゲームをしたりするシオリの横で、ヒナ君は静かに本を読んだりしているだけのこと多かつたが、一番印象に残つているのは、マンションの通路から見た外の景色だ。

ヒナ君のところはマンションの三階、シオリのところは十階、つまり最上階にあって、シオリ宅の前の通路からは、けつこう遠くまで景色が見渡せた。

そこに並んで立つて外を見て、建物の数をかぞえたりすることもあれば、夕日があたつて不思議な色になつた雲を黙つて眺めるよつなこともあつた。夏には遠くの花火だつて見えた。

そんなふうに仲の良かつた二人だが、つまらないできじとをきつかけになんとなくよそよそしい雰囲気になり、しまいにヒナ君は「マンション買つたんだ」と言い放つて隣りの小学校に転校してしまつた。

そう言われて初めて、自分が住んでいるところがチンタイだということを知つたシオリだつたが、結局仲直りできぬまま離れてしまつたのは、シオリにとつて苦い思い出だつた。

そのつまらないできじとが起つたのは、暑い夏のひと、あともう少しで夏休みという頃だつた。

教室で、さあ次は楽しみにしていた水泳の授業だ、と思ったときに、水泳バッグがないことに気がついた。朝はしつかり持つて出たはず。誰かがふざけて隠したに違ひない。

そう思つたシオリは、クラスでも中心的なタイプの男子から問い合わせ始めた。それでも見つかずに、本当は忘れたくせに、などと言われ始めたところに先生が来て、先生がかわって皆に聞いたが、

結局それは出てこなかつた。

そのとき、お調子者の男子の一人が「二つの水着、ヘンシツシヤに盗られちゃつたんだ」などと言い始め、変質者だ変態だと、大騒ぎになつてしまつた。たしかに何年か前にそんな事件があつたらしいが、普通に考えて、その日にそんな隙があつたはずはなかつた。結局、家に忘れたかもしぬ、その日のプールは見学、ということですまつたところで、シオリは思い出した。そうだ、今朝登校するとき、ヒナ君にちょっと持つてもらつて、そのままになつたはずだ。そう思つてヒナ君の方を見ると、真つ赤になつてうつむいている。

やましいことがないなら、言つてくれればいいのに。そうしたら、自分はこんなにからかわれずに、プールにだつて入れたはず。

シオリは猛然と腹を立てた。もしかしてヒナ君も、そのへんの男子と同じなのかも。

要するにシオリはそれまで、ヒナ君を男の子だとは思つていなかつた。だから余計に頭にきたのだつた。

シオリはその場で追求こそしなかつたが、その日のプールを同じく見学していたヒナ君が、プールの授業中、すぐそばに座つっていても、一言も口をきかなかつた。

一方、ヒナ君には、やましいことなんて何もなかつた。ヒナ君がスク水の魅力になんとなく気付いた氣がしたのは、それから何年もしてからだつたから。

それはさておき、水泳バッグに特別な思い入れなど何もなく、單純に忘れて自分のロッカーに突つこんでいただけのヒナ君だが、あの場で申し出れば、自分がからかわれるのには目に見えていた。メガネや体が弱いことだからかわるのは平氣でも、それは絶対に嫌だつた。

だが、その辺の複雑な心理をシオリにわかれといつても無理な話。その日はヒナ君と別々に帰宅すると、自分のところの玄関ドアの

前に、水泳バッグをかかえて立っているヒナ君の姿があつた。何か言いたげなヒナ君を無視してバッグを奪い取ると、一人、無言で中に入ってしまった。

後ですこし冷えた頭で考えて、ヒナ君が自分に意地悪をするはずがないと、思いはした。それでもなんとなく裏切られた気持ちは消えず、自分から先ほどの態度を謝ろうとする気にはなれないシオリだった。

結局、その後の夏休み中にヒナ君の引っ越しが決まってしまい、例のマンション買った発言があつて、仲直りの機会は失われてしまった。それ以降のヒナ君のいない生活は、随分つまらなかつた。

次にヒナ君を見かけたのは中学生になつてからだつた。中学校も別々だったので、たまたま見かけたのだが、ずっと気になつていてまた前みたいに友達になりたいと思つていたのに、そのときは話しかけることができなかつた。

この春、同じ高校に入学したことがわかつたときはかなり驚いたし、しかもクラスまで同じになつた。しかし、すっかり変わつて精悍な感じになつてしまつた「草木君」とは、会えばあいさつする程度の間柄でしかなく、当人は昔のことなどすっかり忘れているように見えた。

### (3) 負けたとか勝つたとか

放課後。気がつけば今年ももう十月半ば、窓の外に見える木々は地味な色になつていて、教室にいても、今日なんかは少し肌寒いくらいだ。

人気のない教室で約束どおり、ぼおっとさやかを待つていると、いつたん部室に行つて来たらしにさやかが「待たせたよ~」と言つて入つってきた。

さやかは天文部に所属している。あまり天文部つていう柄でもないと思うんだけど、と言つたら、お菓子が食べ放題なんだよ、と返された。ちなみにシオリは、陸上部に入部しようか迷つた揚げ句、帰宅部だ。

「シオリさんにじき報告があります。わたし、彼ができましたっ」「そんなことじゅないかとシオリは思つていた。

「はいはいおめでとう。前にアドレス交換したつていう天文部の先輩?」

「そうだけど、なんでそんな棒読み? 昨日呼び出されて、そういうことになつたのよ」

「二ノだの三人の有名人だのは何だつたのよ」

「それはあれ、実用、觀賞用、保存用?」

「はあ、そうなのかあ。遠くに行つてしまつたんだね、さやかは」

「へへへ。誰か他の先輩、紹介しようか」

天文部の彼。ロマンチックで遠大なヘンタイなのか。それはどんなもんだろう、とシオリは思った。

「遠慮しとく」

「そういえば、自分がバカヘンタイな気がするつて言つてたつけ?

それはね、誰かを好きになれば皆オナジ。ある意味当然。ま、何

かあつたらこのおねいさんに相談して」

きれいに透明グロスをぬつたくちびるに、聖母のようなほほ笑みを浮かべると、わざとだらうが、やたら上から田線でさやかが言った。

「はいはい、ありがとひ

「そういうことなので、部活がない日も一緒に帰れないことが多い

なるけど、泣かないでよ

「はいはい、お気づかいありがとひ

「シオリもなんでもかんでもバツサリ断つやけひの、いい加減やめるんだよ?」

「はいはい。さやか、今日はいつもよりかわいいよ

でもちょっと泣いちゃおつかなあ、なんて思いながら、元気に教室を出ていくさやかを見送ったシオリだった。

一人で昇降口を出て、校門の方を見やると、ちょうどそのあたりに草木君の後ろ姿が見えた。何かにつまづいたのか、ちょっととけた。かけた次の瞬間には、まるで何もなかつたかのように歩きだしている。

またしてもいいものが見られた、とシオリはひそかに喜ぶ。よく騒がれるような、部活中だの体育の授業中だの、はたまた長い足を組んで壁によりかかっている姿なんかより、こういうちょっとボヤつとして無防備な姿の方が、昔のヒナ君みたいでシオリは嬉しい。

余談ながら、草木君は卓球部に所属している。

自分はもてようと思つてないから卓球部なのにもてぢやつてますと言つ感じが悔しそぎる、とクラスの男子が言つていた。

中学時代は別のスポーツをやつていたらしく、きまぐれみたいに入つた弱小卓球部で、卓球というマイナースポーツをわが校におけ

るメジャースポーツに押し上げてしまった。部活がある日は活動場所の体育館一階にギャラリーがあふれることもあるといつ。

なんでそんなことになっちゃったのかなあ、とシオリは思つ。

ちなみに、春の体育祭のとき、草木君はリレーなどで陸上部員に劣らない活躍を見せた。それを受けてまわりの人間が、弱小卓球部なんかやめて陸上部入れ、というようなことを言つたところ、自分は日陰が好きだから陸上部なんか入らない、と言い放つた。

その突き放したような言い方をたまたまそばで聞いたシオリは、やっぱり昔のヒナ君はいなくなってしまったんだと思った。それに、自分のことまで否定された気がした。

シオリは中学時代は陸上部で、最終的には百メートルハードルを中心で打ち込んでいた。まつ黒に日焼けして、食事のメニューから睡眠まで、すべてが部活中心にまわつてた。

特に抜きんでた才能はなかつたが、県総体にも出場してそれなりの成績も残した。高校入学後は陸上部から勧誘を受けたが、運動部の活動自体があまり盛んではない学校のため、陸上部の活動も中途半端に思えたし、ある程度のやりきつた感もあつたから、結局入部しなかつた。

シオリの場合、一台めのハードルをイメージ通りに飛び越せたときは、納得のいくタイムが多かった。そのためか、今でも一台めのハードルを飛ぶ直前の夢をときどき見る。そのくらい、陸上に夢中の中学時代は充実していたと思う。

そのかわり、他の経験はあまりできなかつたけど、その辺はこれから埋めていくのだ、と決意を新たにした頃には、ちょうど校門のあたりに差しかかっていた。

何か白っぽいものが落ちてる、と思つたら、スポーツタオルだつ

た。たぶん、草木君のだ。わざとけたときにも落したんだろう。姿を探してみたが、見えるところにはいない。昔みたいに同じマンションに住んでいればすぐに届けられたんだけど、と思いながらも、明日教室でわたそうと、それを拾い上げた。

帰宅したシオリは、今から洗濯すれば乾くだらうと、タオルを洗濯機のところに持つて行った。

そして、さりげなく、偶然そつたみたいな感じで、タオルを顔に押し当てるみた。

うん。

よくわかんないけど、いい匂いかも。

そう思つと同時に、自分は今、何かに負けた、とも思った。

何か、自分の中を流れる血脉のようなものに。

翌朝、早めに登校したシオリは、めんどうだしやや後ろめたいので、袋に入れたタオルを黙つて草木君の机の上に置いておこうと思つていた。

ところが、いつもギリギリにくる草木君なのに、その日に限つてもう登校していた。

しぶしぶ渡すと、特に感慨もなく「ありがとう」と言われ、ついでみたいに明日土曜日の予定を聞かれた。

そして気がつけば、草木君との会話はシオリのよくわからない展開になつていた。

「じゃ、あした、東口改札で二時ね」

白クマッて白よね、といつもいつな調子で草木君がそう言った。

「え？」

「ほら、タオルなくしたつもりだったから新しいの買わないと」

「あ、ああ、タオルね」

「遅れないでね」

「ちょっと、待つて、草木君。なんかよくわからないんだけど」

「キタジマさん。あのね。」  
「ううのはね、疑問に思つたらモレで負けなんだ」

「負けなんだ」

「負ける？」

昨日の洗濯機前での敗北感が頭をよぎった。

「そう、負けてしまうんだ。それでもいいの？」

「ええ？ それは困る、気がする」

「そうだよね」

「うん」

「じゃ、あした、東口改札で一時ね」

Hベリストって高いよね、というような調子で草木君がそつと語つた。

「うん？」

明日一時にその場所に行けば会えるらしいことだけはわか  
つて、会えるのは嬉しいからまあいいか、とシオリは思った。

それに、自分は何かに勝つたのだ、という搖るぎない達成感があ  
つた。

実際には、シオリは特に何かに勝つたわけではなく、するすると  
丸めこまれただけだった。しかし残念ながら、それには気付いてい  
ない。

草木君の方は、ヒナ君と呼ばれていた頃すでに、こういったシオリの丸めこみは割と得意だった。たいへん残念なことに、今も昔も、シオリはそれに気付いていなかった。



#### (4) 長かつた

待ち合わせ場所にほぼ時間ぴったりに現れた草木君は、教室で見慣れた草木君そのままだった。なんとなくヒナ君的なものが見られるのではないかと、ひそかに期待していたシオリは、少し拍子抜けした。

たしかにその日、草木君はスポーツタオルを買った。ただ、それを買う時に草木君が何かシオリに相談するようなこともなければ、ましてやシオリがお金を払わされるようなこともなかつた。

その後、特にこれといって会話することもなく、シオリは草木君が行くところについていくだけだつた。ショッピングモールに入つて、CDを試聴したり、DVDのパッケージを手に取つたり。

これで楽しければ、世間一般でいうところのデートみたいだけど、と思いながら、どうして自分は今日ここに来ることになつたんだつけ、という疑問がシオリの頭に再燃していた。

「つまらない？」

「ううん、そんなこともないけど・・・」

シオリの返事を聞いた草木君の顔は、表情が無くて何を考えているのかよくわからない。

なんで一人でこんな苦行みたいなことしてるんだろう。わたしが相手じゃなければ、もっと楽しかつたんじゃないのかな、とシオリは落ち込んできた。

「じゃ、今日はこのへんにしようか」

「うん」

そう返事をした途端にさびしくなつてしまつ。まだ待ち合わせてから一時間もたつていなかつた。

少し肩を落としたシオリを見て、草木君が斜め前方のビルを指す。

「あそここのビルを、非常階段のぼると屋上まで行けるから、ちょっと大変だけど行ってみようか」

またなんか変なこと言いだしたな、とシオリは思ったが、なんだか離れがたくて、ついて行った。

そのビルの屋上からある方向を見ると、金網越しではあったが、それはシオリのマンションからの眺めによく似ていた。

まだ夕焼けは見えない、でも青空でもない、微妙な色の空が広がっている。どういう光の加減か、紫がかつた色の雲も見える。二人で並んで立つて、遠くの空をぼおつと眺めた。

少し冷たい風が小さく吹いて、シオリの髪の毛が揺らされる。子どもの頃も、いつも二一人で空を眺めたな、とシオリは思いだしていった。

「ヒナ君の、じゃなくて草木君の今住んでるところは、眺めはいいの？」

少しほつこりした気分になつたシオリは、昔の呼び方をしてしまつたのを慌てて訂正して、隣りの人聞いてみた。

「今住んでるところもマンションの三階だし、上の階には行つたことがないから眺めがどうかは知らないな。特に高いところが好きつてわけじゃないし」

特に高いところが好きつてわけじゃない・・・それを聞いた途端、ほつこりした気分は毛虫みたいにつままれて捨てられた。そして今度こそ、今日は来なければよかつたとシオリは思った。

一緒に遠くを眺めたりしたことは、シオリにとつては大切な思い出だが、草木君にとつてはそうではなかつた。考えてみれば、別に驚くようなことじやないけど、自分はそんなこと知らなくてもよかつたな、と思つ。

「でも、あのマンションの通路から、シオリチャンと一緒に外を眺めるのは好きだったよ」

草木君のことばを聞くと、シオリは勢い込んで言った。

「わたしもだよ！」

シオリとしては、今こそ喉にささった小骨を抜くことができるか

も、と思つたわけだが、草木君は少し驚いたような顔をした。

「あの、キタジマさん。ここは照れて俯いたりするとこりでは？」

それはどういう意味かとシオリが考えていると、草木君が不意にふわっと笑つた。

「変わつてないね、シオリチャン」

その笑つた顔にくつきりと昔のヒナ君の面影をみつけて、シオリは、ああ、もう大丈夫だ、と思つた。けんかは終わつたんだな、と。

長かつた。

シオリが感慨に浸つて呆けてる間に、ヒナ君はさつさと次回の待ち合わせの約束をシオリに暗唱させ、シオリのケータイに勝手にアドレスを登録し、ほらほらうつむだよとシオリを先導して、帰途についたのだった。

## (5) その橋は迷惑だ

週明けからいきなり「ヒナ君」「シオリ」と呼び合い始めた二人を、周りはバカップルだ卑怯者だと揶揄したが、元々周りの思惑から比較的フリーに生きてきた二人のこと、本人たちはその揶揄に気がつかないどころか、自分たちが変わったという自覚もあまりなかった。

実はさやかは、この二人が以前から意識しあっていたことに気付いていた。それもあって、シオリから相談したいことがあるというメールを受け取ったときに、「ヒナ君」がらみの相談だろうと予想はついてはいた。

放課後、人がいなくなつたのを見計らつてさやかに伝えられたシオリの相談事は、ヒナ君と手をつなぎたいんだけど、それはヘンタイか、というものだった。

「知らん」

さやかは一言答えてその場を去るひつとしたが、さやか自身はもうつないだのかと食い下がるシオリに、当然だつ、と頭を小突きながら答えてあげた。

「シオリ」

そのとき、教室のドアのところからヒナ君が声をかけ、たちまち二人の間に虹の橋がかかつたのを苦い思いで見ていたさやかは、「チツ」とあからさまに舌打ちした。

そのさやかのしかめられた顔を見て微笑んだシオリを見て微笑んだヒナ君が、

「シオリ照れるなよ」

と言ったのを聞くに及んで、さやかはイスを蹴つて教室を出いでいった。

「今日はこれから部活なんだけど、一人で帰れる?」

「やだなあ、今までだつて一人で帰つたりしてたんだから、大丈夫だよ」

「たまには見学してけばいいのに」

卓球をしているのはヒナ君ではなく草木君で、かつてよすぎてつまんない、と言わないだけの常識をシオリはぎりぎり持つていたので、あいまいにほほ笑んでしまかした。

「じゃあ、気をつけてね」

「うん、ヒナ君もがんばるんだよ」  
手を振つてわかれた。

一人で昇降口を出て校門の方までゆっくり歩くと、校門を出た途端に、シオリの前を歩いていた一年生らしき一人が手をつないだ。それを見て、なんとなく人恋しくなる。シオリはぎりぎりまでコートを着る気はないが、風も日に日に冷たくなつてきている。肌寒さをものともしない感じの前の一人に、シオリは軽く邪念を送りながらも、また昔のことを思い出してしまつた。

中学一年のやつぱり今頃の時期、シオリは一度だけヒナ君を見かけたことがあつた。

最初は、見たことあるような人だな、と思つた程度でヒナ君とはわからなかつた。今の草木君ともまた違う感じだつたが、シオリの知つていたヒナ君とも、まったく違つて見えたからだ。

それでも気がついて声をかけようとしたのだが、ちょうどそのとき、同じ年少し上ぐらいの、華奢な感じの女の子がヒナ君に近付いて、するつと手をつないだ。

それを見たシオリは慌てて物陰に隠れた。自分は部活の大会かな

んかの帰りで、埃っぽいウインドブレーカーを着て大きなスポーツバッグを斜めがけしていた。よく日焼けしていたし、男の子と間違われることすらあった。今までそんな自分を恥じたことなどなかつたのに、いかにも女の子なその子と自分を較べて、恥ずかしくなつてしまつたのだった。

仲が良かつたことは、まだ小さかったから、自分たちもよく手をつないだりしてたけど。でも中学生で手をつなぐってことは、単なる仲良しつてわけじゃないんだろうな。そう考えて、さびしそうな、うらやましいような気持ちにもなつた。

実際には、まだ成長途中のいわゆる美少年な時代のヒナ君は、女子に手を握られたり、ひどいときには抱きつかれたりすることがよくあつて、そのときもちょっとそんな感じだった。

面倒だからと、来るものは拒まず的などころもあつたので、そういうたた攻撃はヒナ君がもつひとつ成長するまで続いたのだが、シオリはもちろんそんなことは知らない。

ええと、さやかのお墨付きもむらつたし、どうやつたら自分もさりげなく手をつなげるだらう。

頭の中で、めまぐるしくそんなことを考えはじめたが、結局なにも思いつくことができないままに家に着いたシオリだった。

## (6) 動物園か、バナナワードか

動物園。どうぶつえん。

一人が親しく口をきくようになつてから、ほぼ三週間がたつていった。その間、都合が合えば一緒に下校したり、近場で待ち合わせてちょっとした買い物をしたりはしていたが、休日にわざわざ遠出（というほどでもないが）するのは、今日が初めてだった。シオリが誘われたのは動物園。ヒナ君は動物が好きだったかな、とシオリは過去の記憶を探るが、よくわからない。

一人で動物園で、なんだか恥ずかしくないですか、という気持ちと、なんでもいいから一緒になら嬉しい、という気持ちがせめぎあい、シオリは現在、こびとづかんみたいな顔つきで待ち合わせ場所に立っていた。

行き先の動物園は、あまり立派でもきれいでもないはずだが、入園料だけは格安だ。小学校四年生の頃だったか、シオリは家族での動物園を訪れたことがある。ここから電車と徒步で四十分程度かかるが、その間にいろいろな話もできると思い、シオリはそれも嬉しかった。

昨日の夜は、遠足前の子どもみたいに、シオリはなかなか寝付けなかつた。今日だつて約束した時間は十一時だつたが、その三十分以上前に待ち合わせの場所についてしまつた。

ヒナ君が来なかつたら・・・いやそういう場合はしようがないから一人でジエラートでも食べて帰れば来た甲斐はあつたなどと、待ち合わせの時間までまだ間があるので、すでに落胆しないための準備まで始めてしまつていた。

時間の十 分前にはヒナ君の姿が見えて、よつやくシオリも安堵した。シオリに気付いたヒナ君が、ふわっと笑う。小さく手をかかげている、その腕の角度がきれいだな、とシオリは思った。

「ヒナ君、来れてよかつた」

「ん？ 何かあつた？」

電車の事故でもあつたのだろうかとヒナ君は思つたが、いやそれよりも重要な話があつたんだと、歩きながら話を始めた。

重要な話とヒナ君は思ったが、内容としてはくだらないものである。要するにヒナ君という呼び方は「草木君」よりはいいけれど、小学生のときと同じといつのもなんだから呼び方を変えて欲しい云々だった。

シオリとしても、さやかなんかの前でヒナ君と言つたときの冷たい視線を思い出し、呼び方を変えれば少しはましになるのかも、と歓迎の意を表した。

結局、シオリはヒナタ君、と呼ぶことにした。君をつけるかどうかでどうでもよい感じの見解の相違はあつたが、そこはシオリの意見がとおつた。

というわけで、シオリとヒナタは、休日で比較的すいていた電車に乗つた。比較的すいている、とは言つてもあいにく二人並んで座れるほどではなかつたので、ドア近くに立つていた。

走る電車の窓の向こうには、うろこ雲を浮かべた色の薄い空が見える。

今日の天気は晴れ、動物園びよう。

「そういえば、今でもカミナリ怖いの？」

窓の方を見ていた視線をヒナタにうつして、シオリが聞いた。

「カミナリ？ ああ、今はそうでもなくなつたかな」

クラスの男子の乱暴な言動には淡々と対応していたヒナ君だけど、カミナリが鳴るとすぐ怖がつた。だから、よくなだめてあげたんだ。シオリは思い出して、ヒナタを生温かい目で見やつた。

一方、ヒナタも思い出して、シオリを生温かい目で見返した。

カミナリが鳴つて驚いたことがあった。怖がつてると勘違いしたシオリが、それ以来、自分を抱きしめてなぐさめてくれるようになつた。ふるえていたのはシオリの方だったけど。

カミナリが鳴つたとき、ゴガネムシが子ども部屋に入ってきたとき、ヒナタが転んで膝から血を流したときも。いつも本当におびえていたのはシオリの方だったが、なぐさめるのもシオリの方だった。ヒナタはもちろん、名より実を取るタイプ。縋るような目をしたシオリがなぐさめてくれる（つもり）という状況を手放す気はなかつた。だから、あの頃のヒナタはシオリの勘違いを訂正する氣もすっぱりなかつた。

それは別に後悔していなかつたが、ビルの屋上で和解（？）以来、昔みたいに姉のような言動を条件反射的に見せるシオリを、ヒナタは少し複雑な思いで見てしまう。

やさしくて、元氣で、最後の詰めが甘いシオリちゃん。

本当のことを知つたら、それこそスク水事件のときのように、すさまじく怒るんだろうな、と。

もうカミナリは怖くないといつ返事を聞いて残念そうな表情をしたシオリだったが、それではと、もう一つの疑問を口にした。

「動物園つてちょっと意外だつたんだけど、昔から動物すきなんだつけ？」

まだ「ヒナタ君」と呼ぶことができなくて、どうしても主語を省いた会話になる。

「別に好きつてほじじゃないけど、あの動物園、モルモットがたくさんいるから。シオリ、モルモット好きだつたよね？」

「モルモット？」

あの動物実験の？と思つて首をかしげた。

「ええと、シオリ。ここも照れてうつむくとこでは？」

シオリは内心の小さな苛立ちが外にでないよつと笑をつけて答えた。

「じめん、それ、わたしじやないよ」

「え？ ジヤ、もしかしてアレ、シオリの兄貴のだったのかな。部屋に大きなぬいぐるみ、置いてあつたよね？」

「ああ、あの『ロト』色の・・・」

シオリのこころが再び生温かい感情でみたされた。そんな人の罪悪感をくすぐるような動物のぬいぐるみが存在すると思つなんて、ほんとにヒナ君らしい。

「あれはね、カピバラ。それと、ぬいぐるみじゃなくて抱き枕」

「カピバラ？ モルモットとは別の生き物？」

「うん。でも、いろいろ考えてくれたんだね。ありがと。それに、一緒にたらバナナワニ園でもうれしいよ」

そう言つてにこにこしてこむシオリを見て、ヒナタがつぶやいた。

「今まで無事でよかつたね」

「ね」といふことは同意を求められたのだろうが、意味が分からなかつた。なら、せつかくだから、照れてうつむくをやってみると思つて、シオリはそうしてみた。

そんなシオリを甘く微笑んだヒナタが見守る。

これをさやかが見ていたならば、おまえらワニに食われてしまえ、と叫つたであら。

## (7) 右手の行先

電車がとまって、シオリ達が立っている方のドアが開いたので、人の乗り降りの邪魔にならないように二人は場所をあけた。気がつけば、次の停車駅が動物園の最寄り駅だ。

再び動き出すときに電車が揺れて、その瞬間、シオリはあることを思いついた。

そうだ、電車が揺れたときに、よろけたフリをして手をつないでしまえばよいのでは。

が、しかしである。ハードルのおかげなのか何なのか、シオリの電車内での安定性は抜群だつた。

これはヒナ君がよろけるのを待つた方が早いかも、そう思つたときには電車が傾いで、シオリは、つい、うっかり、ヒナタの手をとつてしまつた。よろけたりはしなかつたから、非常に唐突な感じで。つながれた右手と右手。

これをさやかが見ていたならば、それなんの握手、と言つたであらう。さやかでなくとも、人はそれを握手と呼ぶ。

せめて反対側の手をとれなかつたのか・・・果然としながら、手を離すこともできず、シオリは思つた。このあいだ、お笑い芸人がおんなじようなことネタとしてやつてたよ。なんで肝心のところでこうなつちゃうんだろう。

一方、ヒナタにはシオリが考えていたことがなんとなくわかつてしまい、シオリらしいと吹き出したかった。だからといって、笑つたりしたら大惨事になるのはわかつていたから、なんとか無表情を保つていた。あらためて今まで無事でよかつた、と思いながら。

結局、次の駅に着くまで一人は無言で握手していた。はた迷惑な

話ではある。

とまつた電車から降りるとき、右手と右手は自然に離れた。

シオリの右手は、もう一度つなぐ手を探そうになつてから、あきらめて自分の反対側の肘をつかんだ。

先に早めの晩ごはんを食べようと、一人は動物園の手前の店に入つた。

シオリは朝、ヨーグルトを少し食べただけだが、あまり何かを食べる気がしなかつた。ヒナタは田の前であつさり食べ物を胃におさめていくので、ほとんど感心しながらそれを見ていた。これだけ食べれば、大きくなるはずだ。

おととい、昨日と同じときはお弁当をつくりたりすべきなのか、と実は迷つたのだ。でも、不器用な自分がつくれるものを見て、誰かがそれを食べる姿を見るのって拷問だよね、と思つてやめた。今になつて、やめといてよかつたとシオリは思つ。自分がつくつたものをいつせいすい食べて貰ふとは、やっぱり思えなかつた。

店を出て少し歩くと、黄色い看板が見えてきた。そこはもう、動物園、どうぶつえん、なのだった。

その動物園は、シオリのおぼろげな記憶にあつた印象よりも広々としていた。ただし、入口でもらつた園内マップを見る限りでは、動物園というより、森林公園とでも呼ぶ方がふさわしい場所のようだ。

園内にいる動物は、アライグマやタヌキなどの小型の動物と、なぜか鳥類が多いようだつた。マツコのちょうど中央あたりに、モル

モットなど小動物がいるらしい、触れ合い広場という場所がある。ヒナタが言っていたのは、これだう。

園全体が、雑木林を切り開いて動物などを配したようなつくりになっていた。

まだ紅葉には少しだけ早いのか、くすんだ緑の葉をつけた木々が、さやわやさやと、葉をならしている。その更に上方から、檻の中に入らずにすんだ、小鳥の鳴き声が降ってくる。

足元を見れば、木の葉の隙間がつくる小さな日向が、枝が揺れるのといっしょにちらちらと揺らめく。風は少し冷たいが、ただ歩くだけでなごんでしまいそうな場所だ、とシオリは思った。しかも隣りにはヒナタがいる。

ここからそう遠くない場所に、展示の仕方が斬新だと評判の動物園が新しくできたせいか、それほど混雑もしていなかつた。子どもが多いのだろうというシオリの予想に反して、むしろ、大人というか、大学生か新社会人といったあたりの年齢の人たち多く訪れているようだ。

その中の少なくない割合が一人連れで手をつないだりしていたので、シオリはタカ目タカ科の鳥だのフクロウ目フクロウ科の鳥だのに鋭い視線をむけて集中した。

足を止めて動物たちの様子を見入っていると、すぐ隣りに立つているヒナタから体温の波みたいなものが届く気がする。昔はなかつたこんな感覚は、何もヒナタの体温が成長によつて上昇したからではなく、自分の意識が変わつたせいだと、シオリもさすがに気付いている。

手をつなぐと言つたつて、もつ小学生ではないのだ。ヒナタはその手を振り払う自由もあるのに、それは無視したままで昔みたいに仲良くつて、自分はいつたいどうしたいんだう。

どうしてヒナタと一緒にいたいと思うんだろう。昔のヒナ君がバカでもヘンタイでもなかつたから？　自分はどうんどうなつていくのに？

だいたい自分は、どう思われているんだろ？

喉にわざつた小骨は抜けたはずなのに、胸にはもつ新しいトゲが生えている。このトゲは、抜いても抜いてもまた生えてくるのだ。気がつけばシオリは、ハリネズミ科ハリネズミ科の動物をぐりぐりと睨みつけていた。

しばらく動物のいない静かな道を歩いていくと、なんとなくにぎやかな空気が感じられた。どうやら触れ合い広場が近いようですがに子どもが多いみたいだ。というか、そもそも完全に子ども向けの場所だろう。

うさぎ、モルモット、ハツカネズミなどが囲いの中で放し飼いされていて、それらを触つたり膝に抱き上げたりできるようになっている場所。囲いの中に入っているのは、ほとんどが小学生か、それより小さい子どもだが、中にはバカップルな感じの大きいお友達も混じっていた。

シオリはこじこじ場所のうさぎやなんかが実は苦手だった。疲れた目をして呆然とした感じの小動物が、氣の毒でもあり、怖くもあつたから。

そういえば、前に家族でここに来た時。

小学生の自分が触ろうともしなかつたのに、中学生になった兄がうさぎを追っかけまわしていた。確かに兄は小動物好きだが、他が小さい子ばかりだったから、かなり目立つてたな。

囲いの中に入ろうともせずつづ立つたまま、シオリがそんなこと

を思い出していると、なんだか体の右側がぼんやり温かくなつた。  
さつきまで左側を歩いていたヒナタが右側に移動していいたせいだつた。

そしてヒナタはけつじつ熱心に広場の中をのぞきこんでいる。実は小動物好きだったのか？

「ここはいいの？」

ヒナタがちょっと首を傾けるようにして聞いた。

「うん」

シオリは答えてしまつてから、モルモットを膝にのづけてうふふふ、をやるべきところだったかと反省した。ヒナタが少し残念そうな顔をしたように見えたから。

モルモットはシオリの記憶にあつたより小さくて、でもとすがどちらもネズミの仲間、見た目はたしかにカピバラの抱き枕とそつくりだった。

## (7) 右手の行先（後書き）

いじまありがとうございました。次話が最終回となります。

## (8) モルモットとサイダーの泡（完）

歩き疲れてしまったので、さすがにシオリは少し疲れた。足がとうより、気分的なものかもしれない。ベンチがあつたので、少し休むことにして並んで座った。

今いる場所が園の中央より少し奥に入ったあたりで、ここから先は、あまり動物はいないらしい。

少し散歩してから、来た時とは別のコースをたどって帰る感じになるのかな、とシオリは見当をつけた。といつことは、ちょうど半分くらいの時間が終わってしまったのか。

隣りを見ると、視線を感じたのか、ヒナタもシオリの方に顔を向けた。

「疲れた？ 今日はシオリ、しづかだつたね」  
「そつかな。ちょっと思索の森に踏み込んでみたからかも」  
考えてもしようもないことを考えて、ずいぶん貴重な時間を無駄にしてしまったとシオリは思つた。

「やっぱりモルモットとか、あんまり好きじゃないでしょ」「うーん、そういうわけでもないんだけど」「シオリのことは何でも知つてると思つてたけど、それでもなかつたな」

ヒナタは言つてから、明らかに、あ、失言、といつ顔をして目をそらす。

「その自信、どこから来るの？」

「自信？ 自信なんて、あつたりなかつたり」  
なんだその答えは。じつには面倒なんだだけ、だからつてさつきの発言はどうなんだ。

この三週間ほどの間、ごくまれにだが、シオリは今みたいにピキっとくることがあった。なんとなく自分とヒナタの立ち位置に関する

る話題がよろしくない気はしていたのだが。

少しむつとした顔を向けると、逆にじつと見つめられて、今度はシオリが田をそらした。

「やつぱりモルモットのとに行つとけばよかつたかな

へ?、とシオリは思つ。今度はなんの話だ。

「モルモットつて、わつきの触れ合い広場の?」

「うん、まあ

なんだ、別にわたしのためじゃなく、ヒナタ自身がモルモットずきだつたのかと、恥ずかしい勘違いに赤面したシオリは慌てて立ち上がつた。

「じゃ、戻ろうよ

「シオリ」

急いで戻ろうとしたシオリだったが、それより先に進めなかつた。ヒナタがシオリを抱きしめたせいで。

シオリの体を引きよせて、ヒナタが髪に顔をうずめた。シオリのことばも思考も形にならずに、どこかに散つてしまつ。

子どもの頃は、もつと半分半分に抱きあう感じだったのに。

白く飛んだシオリの頭に、最初に浮かんだのはそんなことだつた。今は、なんだか動けない。まわりをぜんぶヒナタに囲まれてる。

そのことに、今さらながら焦つてしまつ。

ヒナタの顔が離れる気配がして、指が髪をすくよつに頭を撫ぜた。これは、ヒナタの匂い。シオリの鼓動はぶんぶん鳴るほどにうるさくなつていく。

うるさい鼓動の中から唐突に、好きだな、といつ気持ちがわきあがつてきた。

・・・サイダーの泡つて、きつとこんな気持ちで次々のぼつていくんだな。

「モルモットみたいに、小さくて、あつたかくて、震えてる」  
すぐ耳元で、いつもより少し低いヒナタの声がした。

近ずかる度。それを意識して、よつやくシオリの戦闘意欲が呼び戻された。

モルモットみたいって、それは絶対ほめられていないよね。

「あの」

文句を言おうと、シオリは顔をあげた。見上げた先にある相手の顔は、草木君ともヒナ君とも違つよつて見えて、ことばの続きを今度も散つてしまつ。

とりあえず、とシオリは思つた。モルモットなら自分から抱きつくことはできないけど、わたしは人間でよかつた。

シオリはヒナタの肩に額を落とすと、おずおずとその背中に手を伸ばした。

それから一人は、黙々と歩いた。それまでよりは、だいぶゆつくりと。

しばらぐして、この中のルートだと触れ合ひ広場を通りない、といつことにシオリは気付いた。

「このまま行くと、モルモットのところに戻れないよ

「モルモット？」シオリ、やつぱりモルモット好きだった？

「そうじやなくて、さつきに行けばよかつたって言つてたよね」

それを聞いて、ヒナタは昔のヒナ君みたいに笑うと、先に歩きだしてしまつた。

ヒナタの背中を見ながら、そつだ、きちんと確認しておかなくては、とシオリは思った。

半歩後ろから声をかける。

「あの、ヒナタ君。さつきのあれは、わたしのこと好きっていうことですよね？」

よつやく名前を呼んだかと思えば、その妙な口調はなんの真似だ、

とヒナタは思つ。

「好きじゃなければ、なんだと思つてたの？」

足をとめて振り返つたヒナタが、逆に問い合わせた。

「なんだ？ なんだろう・・・」

「で、自分はどうなわけ？」

二つめの質問は耳に入らなかつたらしく、なんだ、なんだ、と真剣に考え出してしまつたシオリを、ヒナタは少し困つた顔をして見ている。

そのとき着信音が鳴つた。ヒナタのケータイだった。まだ考えているシオリの横で取り出して見てみると、卓球部友から「日程変更に関する緊急連絡」と、珍しくまともなタイトルのメール。

今日ここにシオリと来ることをつっかり漏らしてしまつて、そのときはだいぶ嫌がられたのだが、試合の組み換えか何かを教えてくれるつもりだろうか。

ヒナタが改行だけの画面をスクロールしていくと、画像が見えた。つまりそれは、女豹的な、要するにそういう画像だった。やられた。

気がつくと、シオリが生温かい目をして画面を覗きこんでいる。「相手がヘンタイだらうがなんだらうが、好きになるときはなつてしまふんだね」

悟つたようにシオリが言つた。

最初の部分はおかしいだらう。でも、今のも告白みたいに聞こえないこともない。だからまあいいか、とヒナタは思つた。

さやかが見ていたならば言つたであろう、おまえら恥ずかしすぎる、いつたい何がまあいいかなのか、と。

シオコヒナタは手をつないで、また歩きました。

夕焼けがはじまるまでに、あとまだもう少し。

おわり

(8) モルモットとサイダーの泡 (壳) (後書き)

いつもありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1671y/>

---

モルモットモード

2011年11月20日03時14分発行